



東都大学図書館通信

(沼津キャンパス第6号)

暑い日が続いているが、皆さんいかがお過ごしでしょうか？

今回の図書館通信は図書館リニューアル記念として、青く生まれ変わった図書館にちなんで、皆さんに少しでも涼しくなってもらおうと、図書館通信をまるごと青くしてみました。どうですか？涼しくなってきましたか？どこのページを開いてもすべて青い仕上がりになっていますので、すべてのページを読まれた方は、とても爽快な気分になったのではないでしょうか。冷やしシャンプーならぬ冷やし図書館通信第6号、納涼感いっぱいに、この夏開幕です。

第6号 CONTENTS

- ★巻頭言 太田勝正先生（沼津分館 館長）
- ★教員のオススメ本 母性看護学領域 内宮律代先生
- ★特集：青の図書館に生まれ変わりました！
- ★司書のこの1冊 『エールは消えない』
- ★こんな本あります！（青い本特集）
- ★あとがき

今回のレイアウトは
すべて青 青 青！

卷頭言 新分館長 太田勝正先生
2代目館長

～戦略的図書館活用～

この5月から沼津分館長を拝命しました。これまでの私自身の図書館利用は、自分の専門領域に関連するオンラインジャーナルの閲覧が主で、リアルに図書館へ足を運ぶ機会は多くありませんでした。しかし今回の分館長就任を機に、図書館には多様な機能があることを改めて認識したところです。

当分館は蔵書数こそ限られていますが、その機能を上手に活用すれば、皆さんの学習や国家試験対策に大いに役立つと考えています。具体的には、①図書館に足を運ぶ、②グループ閲覧室やラウンジに集う、③雑誌や書籍に触れる、といったシンプルな行動から始めてほしいと思います。図書館を素通りしてしまう学生さんも少なくありませんが、たとえ30分でも、図書館で過ごす時間は自宅以上に集中できるはずです。

また、人と顔を合わせながら学ぶことで意欲が高まりますし、雑誌の目次を眺めたり写真を見るだけでも、新しい看護の世界に触れられるはずです。それが、専門職としての成長意欲をさらにかき立てることでしょう。

「戦略的」という大げさな言葉を使いましたが、図書館は知の源泉であり、新たな知を生み出す大学の中核的存在です。ぜひ一度、気軽に図書館にお立ち寄りください。お待ちしています。

沼津分館 館長 太田勝正

教員のオススメ本

母性看護学領域 教授 内宮律代

—「生きる」を考える この2冊—

他の人から愛される。
他の人を愛する。
自分から愛される。
自分を愛する。
それによって、人は生きていく。

- ① 三田文學 No.87 秋季号『アパシー』二十五歳の遺稿
百四十枚 片山飛佑馬 慶應義塾大学出版会



うつ病で自殺した25歳の手記です
遺族が三田文學に寄稿され、巻頭小説として掲載されました

編集後記に「文学作品は、なにより作品だけで評価されるべきであり、それを書くためにはどのような犠牲が支払われたかは関係がない、という約束ごとを踏まえたうえで、あえて目次には、『二十五歳の遺稿』と記しました。これは『死ぬこと』ではなく『生きること』を書いた小説だと感じますが、読者諸賢のご判断をお待ちします。」と記されています。

皆さんは、この作品を読み、どのように感じますか

今日、あなたは空を見上げましたか。
空は遠かったです、近かったです。
雲はどんなかたちをしていましたか。
風はどんな匂いがしましたか。

- ② 『最初の質問』詩・長田弘 絵・いせひでこ 講談社



中学3年生の国語の教科書(学校図書)にも掲載されている「最初の質問」を、画家・絵本作家のいせひでこ氏が「絵本」として構成した一冊です。

絵本を読む時々の心境や状況によって、受け止め方が異なると思います。絵本の問い合わせは決して難しいものではないのに、すぐに答えられない。慌ただしい毎日だからこそ、立ち止まって考えることの大切さを教えています。

皆さんは、この絵本の繰り返される問い合わせにどのように答えますか



特集 青の図書館に生まれ変わりました！

青の洞窟を皆さんはご存知でしょうか？「青の洞窟」とは、海に面した洞窟で、太陽光が海底に反射して海面が青く輝くように見える場所のことです。特に、イタリアのものが有名ですが、日本にも沖縄や北海道などいくつかの「青の洞窟」があります。そして沼津にも…はい あるんです。

東都大学沼津キャンパスの図書館は、階段で3階に上がりきり、左に入ると突然図書館としてその空間が広がります。その空間は以前から洞窟みたいだなと思っていました。迷路のように迷いこめば、そこには長く長く連なる本の岩が広がっています。奥に進めば、グループ閲覧室やメディアプラザ A に抜けることが出来るこの不思議な図書館はまさに洞窟のようであり、少し暗めにしてある開架閲覧室は青いロールカーテンを閉めて暖色ライトを照らすと、大変落ち着いた空間となり、ライトアップされた洞窟そのものです。

この度、元ホテルだった図書館の床と壁をリニューアルする事になり、沼津の海、そして富士山の青をイメージして、「青の図書館」として生まれ変わりました。洞窟のような青い図書館で、皆さんのキャンパスライフが、青一色に彩られることを祈っています。日々「今日も洞窟へ行こう！」が皆さんの合言葉となり、卒業後は「母校の図書館は青かったなあ」と、皆さん的心の片隅に残っていただければ、本当に嬉しいです。

新しく生まれ変わった東都大学沼津キャンパス図書館をこれからもよろしくお願ひします。





～司書が選ぶこの1冊～

『エールは消えない』

志村季世恵 著/婦人之友社

この本は沼津キャンパスに所蔵があります。請求番号114・2/S

『エールは消えない』
志村季世恵 著/婦人之友社



人がこの世を去ってからも、応援(エール)の思いはずっと生き残る。決して消えたりしない。『エールは消えない』は、死にゆく人やその周囲の人々へのカウンセリング、ターミナルケアについて書かれたエッセイです。死を「終わり」ではなく、「再生」と捉え、生のバトンタッチという意味が込められた珠玉の1冊です。また、人の関わり方も優しく温かい目線で教えてくれます。

本書は、著者が看取った87歳の母のこと、最期を共に過ごした女優さんのこと、自殺した娘の子どもを育てたお母さん、両親をなくし、身内に引き取られた姉妹と、その姉妹を見守るおばあちゃん、子育て中の盲目のお母さん(沼津市が登場します!)など、5つの様々な家族の物語を描いた内容となっています。読まれる前には必ずティッシュとハンカチのご用意を。第2章の「世界一美しいおむつ替え」では盲目のお母さんの「おむつ替え」の様子が描かれていますが赤ちゃんの排泄物を通して、不便さの中にある「本当の豊かさ」に気づかされ、頭が下がる想いでした。

昨年父を亡くしたばかりであった私は、この本を読む意欲がまったくありませんでした。父に対しての後悔や自責の念が渦巻き、なかなかそのページを開く事ができませんでした。読み始める中、目頭が熱くなることばかりだったのですが、登場人物が皆温かく真摯であり、生きることをとても大切にしている様子に勇気づけられました。

この『エールは消えない』は亡くなった父の誕生日に私の元へ偶然にも届いたものでした。

幼かったころ、私に「本」を初めて与えてくれたのも、また父でした。きっとこの本は、父に対して、いまだに立ち直れていなかった私への「大丈夫 がんばれよ！」というメッセージであり、「エール」だったのではないかと思われます。著者の志村季世恵さんは、「人がこの世を去ってからも、応援の思いはずっと生き残る。決して消えたりしない」と綴っています。きっと皆さんも誰かに「エール」を送られています。そして周りの大切な人、仲間、そして患者さんに「エール」を送り続けられるような看護師になってほしいと願っています。

出会えて良かったと思える1冊です。お父さん、素敵なお父さんありがとうございます。

この5冊はすべて
沼津キャンパスに
所蔵があります。

こんな本あります！～青い本特集～



「満天のゴール」
著/藤岡陽子 小学館
請求番号 913.6/F



「汝、星のごとく」
著/凧良ゆう講談社
請求番号 913.6/N



「俺に似た人」
著/平川克美 医学書院
請求番号 369.26/H



「実習記録につまずいたとき読む本」
著/ローザン由香里
照林社
請求番号 492.912/R



「死を前にした人に
あなたは何ができますか？」
著/小澤竹俊
医学書院
請求番号 490.14/O

～あとがき～

青い図書館通信第6号いかがだったでしょうか？すべてのページを青一色に統一するのは、図書館通信が発行されて以来の初の試みでしたが、作成しているこちらまで涼を感じる作業でした。まだまだ暑い日が続きますが、後期も皆さんのがこの青い図書館で多いに学び 語らい 切磋琢磨しながら、いずれ看護師として巣立っていって欲しいと思います。後期も図書館は皆さんをお待ちしています！良い夏を過ごして下さい

【第6号】2025年8月5日発行

【発行者】東都大学沼津キャンパス 図書館運営委員会

【編集協力】太田勝正 遠藤りら 玉城紫乃

【編集】沼津分館司書 中山祐子

